

財団だより

# 多摩川

1984. 9. 第23号



キアシシギ(シギ科)  
シギ科では多摩川に最も多い。  
春、秋に訪れる渡り鳥。



小平市内の野火止用水

## ■ 多摩川博物誌 ■ ⑦ 野火止用水

井戸掘りの名人、金右衛門火山灰地のいたずらに悩む

今から300年余りむかし、徳川幕府は、江戸市中になくはならぬ飲料水を確保するため、玉川上水を开通させた。が、この上水にはいくつかの分水があって、水の乏しい北多摩地方をうるおわせた。なかでも、川越の領主松平伊豆守信綱が安松金右衛門に命じて掘らせた野火止用水(伊豆殿堀ともいう)は、开通のエピソードが、いかにも武蔵野の土質(火山灰地)の特徴をあらわして面白。

承応3年(1654)、玉川兄弟の努力で玉川上水が完成すると間もなく、信綱は上水から自分の領地に水を引き、新田開発の工事にとりかかった。玉川上水の工事にも参画して、当時一流の土木技術者だった金右衛門は、土地の高低をよく見きわめ、小川村(小平市中島町)と砂川村(立川市砂川町)の境で上水から取水し、野火止村(現在の埼玉県新座市)へ至る約20キロの用水路を設計した。野火止には、信綱の菩提寺「平林寺」があり、そこを通過してさらに北の領地へ引水する計画。

用水堀は人夫100人を使い、足かけ2年でできあがった。しかし水はいっこうに流れなかった。信綱はイライラした。ウデに自信のあった金右衛門も「不思議でござる」と首をかき上げるばかり。

翌年まだ水が通じなかった。堀はカラカラに乾ききっていた。多額な費用をかけた工事が、このザマでは世間の笑い物になるばかりと、信綱もとうとうしげれを切らし、金右衛門を呼びつけて「お前は土地の高低もわからないのか」と怒った。「いやそのわけは…」と金右衛門は調査結果を報告した。測量に間違い

はなく、水は流れるはずなのだが、水のしみ込みやすい火山灰地(関東ローム層)が、途中でどんどん水を吸ってしまうのである。「ちょっとしたきっかけさえあれば、かならず水は通じます」。金右衛門はもう自信を取戻していた。

その翌年のある夕方、空が真暗になったかと思うと雷鳴がとどろき、大雨になった。今でいう集中豪雨である。たちまち堀は激しい水流がたぎるようにあふれ、一挙に野火止まで通じてしまった。集中豪雨が呼び水の役を果たしたのだ。飛びあがって喜ぶ金右衛門。信綱は「3年間、よく初志をまげずにごんばつてくれた」と、その縁を加増して労にむくいた。

野火止用水は流域の小平、東村山、東久留米、清瀬の四市で、つい最近まで飲料水に使われていたという。むかしの井戸掘りの技術では、地下数十メートルの深井戸を掘るなどとてもできない相談であるだけに、开通当時の人びとの喜びようが想像される。

米軍大和基地の南側にある野火止用水取水口は、いま都水道局の小平水衛所になっている。淀橋浄水場が閉鎖され、玉川上水の水は東村山浄水場に直接送られているが、このため、むかしの取水口はこわされ、暗渠式水路が4キロにわたって作られた。うち2キロは、野火止用水の水路を利用したものだ。さる日、信綱と金右衛門の墓のある平林寺で、二人の徳をたたえる供養の式が行われ、都水道局のお役人も列席した。

「武蔵風土記」朝日新聞社編1971

※東京都は今年、野火止用水を保全する目的で下水道の処理水を放流しはじめた。

## 多摩川散歩

### ●海沢から古里を歩く



大橋峠への朝の道を歩く。この道は御岳山から鳩ノ巣溪谷へのコースとして多くの人たちに利用されている。きょうの私は大橋峠から海沢に下ることにした。これといった変化のあるコースではないが深緑が美しい。大きな橋の木のある峠で右に鳩ノ巣への道を分け、本仁田山が高く大きいのぞめる道を海沢の部落についた。多摩川を橋で渡ると青梅街道で、白丸方面に歩けばほどなく数馬のトンネルとなる。トンネルを抜けると杉林の中に白丸部落への道がある。この道を少し登って左に折れると「数馬の切通し」に出られた。岩を削って道をとおした当時の苦労が偲ばれる。岩頭に立てばまさに絶景である。明治の文学者田山花袋が、「多摩の上流」で絶賛した数馬溪谷の美が十分堪能できた。道を戻って白丸部落に向う。十一面観音薬師を祀る堂を見て細くカーブした道を下って行くと白丸駅の東を踏切り、まもなく青梅街道に出た。ここから鳩ノ巣までのしばらくは、右に白丸湖を見ながら車の通行がはげしい街道歩きとなる。鳩ノ巣溪谷は名勝として知られ、ここに遊ぶ人は多い。

私は先を急ぐことにし、鳩ノ巣駅西の踏切を渡って棚沢の集落へと歩いた。急勾配で多摩川に落ち込む山腹のわずかな平地を利用して家が雛段状に建っている。カーブの多い細い道だが、平坦で

### 東京都環境保全局 梶 玲 樹

やがて集落を出はずれると、国鉄線鳩ノ巣トンネルの入口が見える。そして「はなや」という旅館だった建物が右手にある。道傍には享保13年(1728)の銘がある石仏が置かれ「はなや」の戸袋の絵が美しい。「腰まくり」「花折戸」といった多摩川から吹き上げる風の強さや絶壁に身の危険をさらしつつ通行したであろう昔の人の苦労が偲ばれる地名をへて、再び青梅街道へと歩く。このあたりは川沿いの散歩というより、川をはるか下に見る山高く谷深しの景観が展けている。花立橋を渡って下り気味の街道を古里方向に歩くこと100米。右に入る道について下って行く。白丸、棚沢と同じくここも古里附の滝を中心とした古い道である。入川谷が多摩川に注ぐところにある「古里附の滝」は落差5米、そう見ばえのするものではないが、その昔、多くの旅人が、この滝で疲れをいやしたことだろう。滝をあとに古里駅方向に道をすすむと、「杣職人講中」と刻まれた石碑を見ることができ、再び道は青梅街道と合う。このあたりを小舟波といい、町のなかではもっとも平坦地の多いところだ。古い町屋も、近年道路の拡張によってすっかりその様相が変わってしまった。古里駅は街道から左手にほんの少し入ったところにある。前夜の宿泊地御岳山へとつづく丹三郎尾根をのぞみながら立川行きの電車に乗った。





多摩川の自然を取り戻す会 飯島春子

私は今朝夢をみた。河原に月見草がさきみだれ、ほたるが舞い、あゆがおよぎ、そこで丸はだかでも何人かの友達と水あびをしていた。あゝたのしい。でもそれが60年前いや30年前迄は日常の生活であった。「姉ちゃんあゆをおじさんがくれたよ。今夜のおかずにしよう。天ぷらにするか、塩焼きか。」そこで目がさめた。あゝ夢であったのか。

あの美しい水はどこへ行ってしまったのか。鮎の住めない川、月見草の咲けない河原。ほたるを死に至らしめたのは、だれか。それは私共人間ではなからうか。合成洗剤のあわ、家庭排水の重金属。それでも尚私は夢を追い続け、合成洗剤の追放に情熱をもやし、東に西にとびまわっている。

昔多摩川は水晶の川宝石の川と外人からもたたえられた。私が7才の時だったと思う。私は稲田に生まれ育った。稲田堤の桜は当時余りにも有名で、花見時には売店が並び甘酒、キャラメル等が山とつまれていた。

今は亡き兄に連れられてある日夜桜を見物に出かけた。あんちゃんあの枝1本ほしいよう。だめだめ。『桜きるべからず』この字がよめないか。よめてもどうしてもほしい、1本でいいから。兄は人かげのない一番すみの暗やみまで私を連れて行き、かたぐるまをして、とうとう私に1本の桜の枝を折らしてくれた。とたん「こら一、だれだ桜の枝を折ったのは。」監視員の佐野源松さん。さあ大変。兄は私をすばやくおんぶしてころげおちる様に堤をかけおり一目散に家に帰った。途中兄は私に佐野源松のおじさんにつかまったら、あしたはしばり首にされて村中、桜どろぼうと云ってさらし者になるんだよ。そしたら一生お前は学校に



も上れずお嫁にも行けないと悟されて、しげしげと家に帰ったとたん、父から桜の枝をとったのはだれだとさんざん叱られたあげく、元の枝に戻して来い。そして佐野さんにあやまって来い、そうしなければ家に寝かさないと云われ、母と三人で桜を元の枝にゆわき佐野さんにあやまりに行った。その時の事は60年たった今でも心にやきついている。折った桜はもとには戻らない。あなたの指も折ってしまえば生涯もとにはもどらない。『桜折るべからず』帰りにおいしいお菓子を沢山頂いて家に帰った。昔の人は1本の桜の枝をこうも大切ににした。今はむざんにも荒れ果てた稲田堤桜をみる度に私の心はいたむのです。

歌いはやせよ多摩川音頭。あゝちりひょっと、ちりひょっと。あの歌は私が小学校の時の小塚文先生のお兄さん、小塚信二さんが作詞され、西條八十さんが作曲されたものです。私は次の世代にこの美しい川をうけつがせたいと念じて居ます。しかしかなわぬ夢の様です。もう10年にもなるでしょうか、「合成洗剤になく多摩川」と云う8ミリをとりました。その終りに多摩川音頭をふきこみました。どうぞつたない8ミリではありますが、柳沢文生先生や世田谷区にお住いの湯川洋蔵さんも出て来ます。一度ぜひ機会があったらごらん下さい。

私共は祖先の残してくれた文化遺産を、次の世代をになう子のために、桜並木も、清らかな水も、ましてやほたるの住む多摩川をよみがえらせる事が出来るでしょうか。あゝ又あした、今日の夢の続きをみたいものだ。せめて夢でもよい、多摩川よみがえってくれ。



### ●東豊田緑地と湧水

山道省三

中央線に乗って豊田駅に近づく頃、車窓右手にうっそうとした緑地が続く。長さ約1km、幅約60mのこの緑地は、昭和50年東京都条例に基づき「保全緑地」に指定されたところである。クヌギ、コナラ、エゴ、ケヤキといった落葉樹の雑木林となっている。林中には散策路が設けられているが、薄暗い中ひんやりとした冷気が感じられる。

この緑地は斜面にあり、危うく宅地化からのがれたという気がする。数年前の秋、この緑地を歩いたとき、落葉の間から清水が何ヶ所も湧き出したのを見た。その清水はすぐ下の道路にもあふれ何かもったいない気がしたことを憶えている。

日野市はこの緑地から流れる湧水を集めて、子供達が水遊びできる水路の建設にとりかかっている。そして、この春その一部が完成した。

日野市はこれまで浅川の利用や保全、農業用水路の保全、管理といった水辺の対策に力を入れてきた。財団もこの調査研究に助成を行い、協力してきた。この新しく整備された水路即ち黒川は途中で農業用水として利用されるが、流末は浅川へ注ぐ。湧水量がどのくらいか正確にはわからないが、この夏の盛りに再び訪れた時ですら滔々と流れる様子は、野川の元町用水でみた 国分寺の湧水よりさらに勢いがあったように思う。

財団が昨年発行した「多摩川'83」は野川の特集であった。この本で一番訴えたかったのは、湧水の保全である。野川は自然の水源地を失った川だ。それゆえ、上流部の水路は下水道同然になってしま

ったのである。ところが中途でいくらかの湧水を集めることによって、かろうじて下水道化を防いでいる。この時の調査で改めて、川にとって湧き出る清水の大切さを知ったのである。黒川が川であり続けるためには、この湧水を恒常的に確保していくことにつきる。

消防研究所の細野氏によると、湧水を涵養するために必要な後背地は地質等も影響するが驚くほど広大な面積は必要でないという。東豊田緑地の上、つまり多摩平地区には広い団地が連なっているため比較的オープンスペースが多く、また芝地や緑地も多いことから、この空間的ゆとりが雨水を地下に涵養する役目を果しているものと思われる。地下水の涵養対策は建設省や東京都で積極的に進められている。このそもそもの動機は治水上雨水を川へなるべく流さないようにすることが目的であった。以前この項でも述べたが、羽島のつつじが丘ハイツの例では、雨水を地下に強制浸透させる方法で90%以上を処理している。このように強制的な浸透を行わなくてもすむのであれば幸いなことである。

湧水が果たす役割で重要なことは、先に述べたように水質改善の効果である。現在、黒川が流れ込む浅川も水質的には良い状態ではない。これを改善するには下水道の整備も重要であるが、今のままの処理法では、水質の悪化はくい止めるが、それ以上の改善は、望めないという指摘があるように救世主にはなりえない。そうだとすれば、あとは川の自浄作用に期待するしかない。川の自浄作用のうち目に見えない形で川に入る湧水の効果には野川の例が示すよう十分期待が持てよう。東豊田緑地の湧水は、後背地の土地利用と湧水口が保全緑地として守られているという二つの点で恵まれていることである。今回、この湧水が常に人の目にふれ、その量や質が住民の監視のもとにさらされるようになったことは、単に水遊び場ができたこと以上に意義がある。

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

助成集報（第9巻）及び多摩川環境調査助成集（第5巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

#### 助成集報（第9巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川水系における微量元素に関する研究—3ヶ年に亘る経時変化—	平 井 昭 司	武蔵工業大学原子力研究所助教授
●多摩川水系流域における蛛形類の分布とその生態学的研究	松 本 誠 治	杏林大学医学部生物学教室助手
●大栗川流域の土地利用が河川水・地下水質に及ぼす影響に関する研究	小 倉 紀 雄	東京農工大学農学部助教授
●多摩川下流域における土地・地下水環境に関する研究	長 沼 信 夫	駒沢大学文学部教授
●多摩川水系魚類の餌料についての研究—河川敷流水内における稚仔魚の初期餌料についての研究—	杉 浦 宏	井の頭自然文化園水生生物館長
●多摩川流域の都市河川の地下水流出の涵養源に関する同位体水文学的研究	松 尾 禎 士	東京工業大学理学部教授
●流域の集水システムと水質予測方法に関するシステム工学的研究	華 山 謙	東京工業大学工学部社会工学科教授

#### 助成集（第5巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川流域の生物と環境に関する学習の基礎的研究—I. 草木を中心にして—	栗 田 敦 子	東京都立教育研究所指導主事
●多摩川におけるミズムシ( <i>Asellus hilgendorffii</i> )およびシマイシビル( <i>Erpobdella lineata</i> )の分布—中腐水性水域の確定—	小 林 貞	私立カリタス女子高等学校教諭
●多摩川の自然を小学校の理科教材として活用する方法の研究—稲城市を対象にして—	加 藤 和 俊	稲城第三小学校教諭
●秋川流域の陸水学的研究—特に秋留台地の地下水と秋川の流量について—	角 田 清 美	都立小平南高等学校教諭
●雑草による多摩川汚水の浄化	宇都宮 嵩	川崎市住民
●多摩川水系のトンボ相とその生態	大 森 武 昭	大田区立大森第二中学校教諭

# “これからの都市と川と人”

【入場無料】

## (財)とうきゅう環境浄化財団創立10周年記念事業

—講演とパネル ディスカッション—

- 講演 「多摩川にみる都市と川の変貌」  
高橋 裕 (東京大学工学部教授)

● パネルディスカッション

「都市文化にみる川と人」

- パネリスト 戸塚 文子 (旅行作家)  
津端 修一 (広島大学教授・都市計画)  
中村 良夫 (東京工業大学教授・社会工学)  
加藤 幸子 (作家)
- コーディネーター 涌井 雅之 (財団選考委員)

- 日時 昭和59年9月7日(金) 午後2時～5時

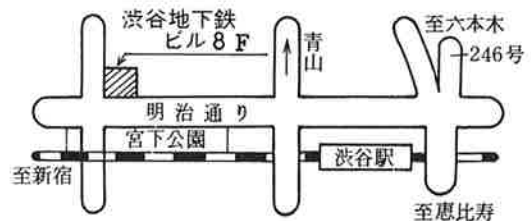
- 場所 東京商工会議所ビル 東商ホール  
東京都千代田区丸の内3-2-2 TEL 03-283-7680

7月1日発行の、財団だより多摩川第22号をごらんになり、お葉書でお申し込みになられた方は、全員入場できます。

尚、余席があります。ご希望の方は至急下記にお問合せ下さい。

- 連絡先 〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14 渋谷地下鉄ビル内  
(財)とうきゅう環境浄化財団  
TEL 03-400-9142

- 発行日 昭和59年9月1日  
● 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125